

専修大学

図書館だより

第51号

2004.1

CONTENTS

学生への図書館サービス (後藤 暢)	2
「失われた10年」と経済書 (田中 隆之)	3
西洋の図書館事情	
● フランスの図書館 (伊吹 克己)	4
● バルセロナの図書館を利用して (戸田 佐智子)	5
図書館の資料保存対策 (小泉 啓子)	6
洋古書の製本構造と保存の関係 (鈴木 京子)	7
図書館インフォメーション	8

学生への図書館サービス

図書館委員会委員 後藤 暢



大学図書館のサービスに対して、教員からは折々に意見や要望が寄せられるのでまだ論議が期待できるが、学生の利用については掴みにくいところが多い。私が知っている学生たちは、司書や司書教諭の資格をめざす、図書館に強い関心をもつ人が多いが、学生全体を考えたとき、図書館の利用は必ずしも活発ではないと見られているようである。いくつかの大学図書館の様子を聞いてみても、あまり図書館に来ない学生は結構多いらしい。これは現代の学生が置かれた状況や大学教育全体の問題なのであって、必ずしも図書館の側の問題ではないとか、必要な学生だけが来ればよいなどという考え方もあるかもしれないが、近年のいくつかの兆候をみると、どうもこのまま放置する訳に行かず、やはり図書館のサービス体制を考えてみる必要があるように思えてくる。

その兆候というのは、一つには、小中高校で学校図書館の利用が少しずつだが増えていることである。「総合的な学習」が定着してくると、おそらく学校図書館の利用も本格的になるであろう。日本の学校教育が改革を迫られているとすれば、その一部分は確実に学校図書館に関わらざるを得ない。5年前に学校図書館法が改正され、司書教諭の発令が進んだのも、あるいは子どもの読書活動推進法が制定され、学校を巻き込んだ読書推進が試みられつつあるのも、その現れであろう。数年後には、図書館を利用した学習を経験して大学に入ってくる学生たちが今よりも増えてくることだろう。

いま一つは、日本人の生活の中で図書館との関わりが増えていると思われることである。統計上でも公共図書館利用者は増えつづけているが、と

くに図書館に立ち寄り背広姿の人が増え、しかも本は借りないで調べものだけをして行くという話をよく聞くようになった。ある市立図書館の利用者調査で、30%を超える人が「仕事のために図書館を利用した」と答えた例もある。仕事のために図書館を必要とする人が増える、これは日本の図書館では従来見られなかったことだ。倒産やリストラの続く社会の中で、一人ひとりが孤立して自己責任で生き抜くことを余儀なくされる現実の反映かもしれない。学生たちは否応無しに、そのような社会に送り出されるのである。

明治以来日本社会は一方で図書館を作りながら、一方で人々から図書館のある生活を奪い情報を奪ってきた。図書館については漸くその構造が変わりつつあると見ることもできる。

大学が図書館利用に習熟した学生を迎え入れるようになると、大学の図書館では、ちょっと考えただけでも、おそらくレファレンスサービスの利用が今よりふえ、OPACとともに種々のデータベース利用も求められるなどの変化が生じよう。また学生が卒業後図書館を利用しながら生きて行けるよう、学生の図書館利用を支援する図書館サービスが必要となろう。大学のランクづけに、大学図書館のサービス比較が影響するようにならないとも限らない。

図書館をめぐるのは、既存観念にとらわれず、まず現在の学生の意識調査から出発して、長期にわたる図書館サービスの充実計画に取り組むことが必要となるであろう。

(ごとうとおる：文学部教授)

「失われた10年」と経済書

田中 隆之



バブル崩壊後の日本経済の低迷が、「失われた10年」などと呼ばれるようになって久しい。確かに景気は、いま循環的な回復局面を迎えている。だが、不良債権問題の根深さ、金融政策論議の混迷、財政赤字と社会保障危機の深刻さ、産業構造転換の遅さなどを考えると、日本経済の先行きは暗い。ひょっとしたら低迷を脱するのに、さらに10年、いや20年を要するのではないか、とすら疑われる。

こうしたなか、街には経済書が氾濫している。低迷脱却の処方箋は、それこそ「百家争鳴」である。真摯な論争は歓迎されるべきだ。ところが、本屋の店頭に平積みになっている「売れ筋」には、派手に他説をこき下ろし、論争を自己目的化したかの本が幅をきかせている。この政策さえ行えば問題は解決する、といわんばかりの断定的な筆致のものも多い。10年を超える低迷にしびれをきらし、世間やマスコミ、出版界は明快な処方箋を求めすぎているのではないか。世の中には、明快な答えのない問題だってあるはずだ。

これは経済系出版社の編集担当者から聞いた話だ。数年前、仮にある担当者が本の出版を期に3つ企画していたとしたら、今は4つに増えている。多くの出版社が似たような内容の本を作るので、売れ行きが落ち、1企画あたりの利益は小さくなる。だから出版企画を増やして、なんとか収益の向上をはかる。本の価格付けは、数年前に比べ、明らかに低くなっているという。供給過剰で価格が低下するから、個々の生産者は収入増を狙って生産を増やす。その結果、経済全体ではさらに供給過剰が進み価格が下がる。

この悪循環は、農業恐慌のメカニズムを連想させる。デフレの発生経路の一つを示すアネクドートでもある。本の出版を希望する書き手にとってはうれしい話のような気もするが、そうではない。同じ著者が違う出版社から同じような本を出しているのが実情だ。当然、本の質は低下する。

だから、この分野で、ゼミの輪読に適した良質の本を探そうとすると大変に苦勞する。紙幅も限られているので、この1~2年の出版の中で良質だと思われたものなから、1冊だけ紹介しておこう。

池尾和人著『銀行はなぜ変わらないのか』中央公論新社、2003年。

ついこの間、私のゼミで読み終えたが、学生はいい勉強をしたようだ。何事も断定しない書きぶりのなかに問題の本質に迫る分析があり、私も満足した。説明が平易なので、経済が専門でない社会人にも薦められる。

日本経済を低迷から脱却させるのには、実は相当な時間を要する可能性が高い。にもかかわらず、マスコミ、したがって世論は、即効性のある手段を求めている。政治家は、そのような「特効薬」が、うそでも「ある」といわなければならない立場に追い込まれている。だが、学者やエコノミストは違はずだ。少なくとも、本の質を向上させることができるのは、世論でも出版社でもなく、書き手であることだけは確かであろう。

(たなか たかゆき：経済学部教授)

フランスの図書館

伊吹 克己

図書館の方から「外国の図書館」という表題で寄稿を求められたが、私がそういう内容を書くにふさわしいのか、いささか疑問に思っている。とはいえ私自身は、図書館に対して強い愛着を持っていることは人後に落ちないつもりである。学部から大学院、そして教員になっている今まで、専修大学図書館は私の生活の一部であったと言っていい。また、私は家の近くの公共図書館もよく利用していて、昨年新しい家に引っ越した際にも、図書館が近くにあるということを購入の条件としていたほどである。それだけ図書館に親しんでいるのに、どうして外国の図書館について書くのにふさわしくないのかといえば、その理由は私の専門にある。

私の専門は哲学だが、もう少し詳しくいうと現代ヨーロッパの哲学である。したがって、ヨーロッパで出版される新刊書や雑誌があれば、それですんでしまう。もちろん、現代思想を専門にするといっても、古代ギリシアから現代にいたる二千五百年のヨーロッパ思想史を背景にして書く必要がある以上、手に入りづらい昔の本や資料とは全く関係がないわけではない。しかし、それらは新しく編纂されたり翻刻されたりしたもので十分であるので、図書館の書庫に潜り込んで埃まみれになって古い本と格闘する必要はまずないと言っていい。したがって、外国に行っても連日図書館に行くなどということはあまりないのだが、それでも必要になるときはある。

私は1985年にはじめて1年間パリに滞在した。このときは図書館に行って本を調べる必要が生じた。それまで日本では手に取るのでできなかったフランス各地の大学の紀要をその機会に調べようと思っていたのである。オペラ座にほど近いパレ・ロワイヤルの裏にある暗く堂々とした建物の国立図書館にはじめて入ったときのことは、今でもよく覚え

ている。入館の手続きをすませて、中に入り、蔵書カードを調べて、持参したリストと照合し、申込用紙に必要な雑誌を記入して係りの人に渡した。ここでは係りの人が利用者の席にまで本を持って来るというシステムになっている。30分ほどで、その係りの人が本を持ってきたが、頼んだうちの1冊しかないと言って、それを渡してくれた。後の3、4冊についてはないという。借り出されてはいないということなので、不審に思った私は、閲覧室の入口のところに銭湯の番台のような格好で閲覧席に向かって座っている司書の人に聴いてみた。その返事に驚いた。そもそも置いてないというのである。だけどカードがあり、分類番号などもカードに記入されているではないか、と言うと、そういうことはよくあることだと返事されてしまった。その司書はいかにもよくあることだという具合に言って、もしどうしても読みたければ、発行した大学の図書館に行った方がいいとも付け加えた。こんなことは日本では絶対に考えられない。まして「国立図書館」である。フランス人も含めて何人かに、こんなことがあるのだろうか、と尋ねてみたが、あり得ないという返事が返ってくることはなかった。

このことがあってから、国立図書館に行くことはまれになった。しかし今回、寄稿を求められたことを機に、あれこれ思い出してみると、昨年の在外研究でよく本を借りにいったリヨンのエコール・ノルマル（高等師範学校）の図書館や、必要があって通ったパリのギメ美術館の図書室など、やはり外国でも図書館との縁が切れていないことに気がついた。ところで、フランスの図書館で、お世話になった図書館員たちは一研究者にすぎない私に実に親切にしてくれた。最後に役所の窓口にいる中年の婦人を筆頭に、不愉快な思い出が多々あるパリでも、その例外はなかったということは特筆しておきたい。

(いづきかつみ：商学部教授)



バルセロナの図書館 を利用して

戸田 佐智子

大学生の頃よりスペイン語の勉強を続け、そして教育分野に興味があったこと、また、留学にあたり、幸いにもロータリー財団より奨学金をいただけることになったこともあって、2001年から2003年にかけて、スペインのバルセロナ大学の大学院修士課程（教育関係専攻）へ留学しました。

留学中、図書館は私にとってなくてはならないものでした。

バルセロナ大学は数多くの図書館を有していますが、その一つ、教育・心理学関係の書籍を中心に所蔵している図書館を主に利用していました。ちょうど高台にあったということもあり、海と山が見渡せ、勉強で疲れたときは、図書館から見えるすばらしい景色を眺めたりして気分転換をしたりしていました。

図書館を利用しはじめたころは、言葉の問題もあって、一冊の本を探すのにとても時間がかかったのを今でも覚えています。本を置いてある場所がいくら探してもわからず、図書館のスタッフに尋ねると、検索して案内してくれるスタッフもいれば、「コンピュータで検索して調べてください」と言われたりすることもしばしばで、時間をかけて本を探すことも少なくありませんでした。本当に慣れるまでは毎回緊張しながら、図書館での日々を過ごしていました。

試験が近くなると、たくさんある机がほぼすべて学生で埋め尽くされるのですが、ふだんはバルセロナ大学の学生のみならず、一般の市民も入館できるようになっており、さまざまな年齢層の人たちが利用していました。

この図書館のほかに、ポンペウ・ファブラ大学というバルセロナ市内にある別の大学の図書館にもよく通っていました。通学に便利で、開館時間が長



バルセロナ大学の校舎の一部(上)と図書館入口(右)

いこと（平日は深夜の1時30分まで、土曜・日曜・祝日は21時まで）、そして、バルセロナ大学が持っていない書籍を所有し、また集中して勉強できる環境が整っていたからです。また、カタルーニャ州にある8つの公立大学、そしてカタルーニャ図書館との間で提携されているカタルーニャ大学図書館協会というのがあり、バルセロナ大学とポンペウ・ファブラ大学も加盟していました。この協会に所属している大学の院生はこの協会に加盟している機関のどこからでも書籍を借りることができたので、本を借りに、そして勉強をするためにこの図書館を利用していました。

人それぞれ図書館を利用する目的は違うと思います。また、コンピュータやインターネットの普及で図書館の利用方法も大きく変化してきています（バルセロナ大学ではホームページを通して、本の検索のみならず、貸出状況の確認、また電子メールで貸出期間の延長手続きや本の予約が可能です）。

このような便利になった世の中だからこそ、私は、図書館へ自分の足で行き、利用することをあえて勧めます。書籍の内容を通してだけでなく、図書館の環境・雰囲気、そして必要としている書籍を見つけるまでの過程などから学ぶこと、得ることは多いと思うからです。

(とださちこ：国際交流事務課)

図書館の資料保存対策

小泉 啓子

資料をいつでも、誰にでも、いつまでも利用できるようにしておく事は、図書館のもっとも基本的な機能のひとつです。資料は利用されればされるほど傷みます。利用されなくてもほうっておけばさまざまな原因によって壊れていきます。資料をいつでも利用できるようにしておくために図書館では資料保存対策を行なっています。

図書館内には、常に500~1,000個/m³の微生物細胞が単独またはほこりに付着して浮遊しているといわれています。微生物が生育しにくい環境条件を保持することが資料を保存する重要なカギとなります。微生物の生育を左右するのは温度と相対湿度です。紙資料では常に低温低湿（温度10℃以下、相対湿度30~40%）のもとで管理するのが理想ですが、この温度では人は書庫に長い時間滞在する事が難しくなります。資料は人が触れ、利用してこそ価値のあるものです。人と資料の温度と湿度の現実的な妥協点は、温度25℃、相対湿度55%とされていますから、この前後の温度域の中で管理できればよしとしなければなりません。さらに清潔で通気性のよい環境を維持し、粉塵・黴・害虫や有害小動物を導き入れない管理が必要になります。飲食物の持ち込み禁止の大きな理由は、図書館内に微生物や害虫の繁殖する要因を入れないためです。保管環境を整えて館内へ持ち込ませないための防御システムを確立し普及させることは利用者の協力が不可欠です。

では、入ってしまった微生物や害虫はどのように排除するか。本年度は、虫菌害対策として特別書庫に収蔵されている貴重本の燻蒸を行いました。燻蒸とは、常温で気体となる薬剤を作用させて、着生する生物（虫・黴など）を殺滅することです。一種の毒ガスを用いるため、実施した夏期休暇中の一斉休暇の8月12日~17日は120年記念館の立ち入りを制限しました。特に図書館とその上・下階は立ち入り禁止とし、安全対策を万全としたうえで専門の業

者によって24時間体制で管理するなど大掛かりなものとなりました。

燻蒸の効果的な薬剤としては、およそ20年ほど前から臭化メチルが短時間で確実に殺虫できる燻蒸剤として広く用いられてきました。しかし、臭化メチルはオゾン層保護のために先進国では2004年末で全廃されることが決定されました。燻蒸に頼らない保存対策として、IPM (Integrated Pest Management) 「総合的害虫管理」というシステムが欧米を中心に生物被害防除のあり方として広がっています。これは薬剤を用いた殺虫・殺菌に代わり、あらゆる有効な手段を合理的に併用し、有害物質を施設内に入れず、カビも生育させない予防を第一にして、被害が発生した場合でもできるだけ地球環境や人間の健康に考慮した駆除方法をシステムチックに採用していこうとする方法です。言い換えれば日常的にきめこまやかな管理をしなければならないということです。

その他に光、粉塵、大気汚染、自然災害、コピーによる損傷と劣化原因は多様です。また、近年深刻な問題となっているのが酸性紙です。酸性紙を用いて印刷された図書は紙中の酸の作用により50~100年でボロボロになってしまいます。ヨーロッパでは19世紀の半ば、日本では明治時代からごく最近までの書物や文書はこの酸性紙で作られてきました。紙中の酸を中和する脱酸処理を施す事によりその寿命を延ばすことが可能になってきていますが、図書館の所蔵する酸性紙は膨大であるためコストの問題で実施することが難しいのが現状です。とりえず保護と酸性の被害を広げないための保存箱を作成し、劣化が著しいものをマイクロ化し複製することで利用に供することを計画しています。

手にとった資料が傷んでいたら、やさしく取り扱ってくださいね。



(こいずみ けいこ：生田図書課)

洋古書の製本構造と保存の関係

鈴木 京子



一橋大学社会学古典資料センター主催の図書館員（大学図書館等）あるいは西洋古典資料の研究者を対象にした、西洋古典資料の初めとする資料の修復保存に関する講習会が（平成15年8月4日~8月6日）開催され、私も参加する機会を得た。

講習会の課題を大きく3つにまとめると①「保存作業」②「劣化調査と保存計画」③「材料と環境」になる。各課題の中から①「保存作業」、特に保存情報としての製本構造について少しふれてみたいと思う。

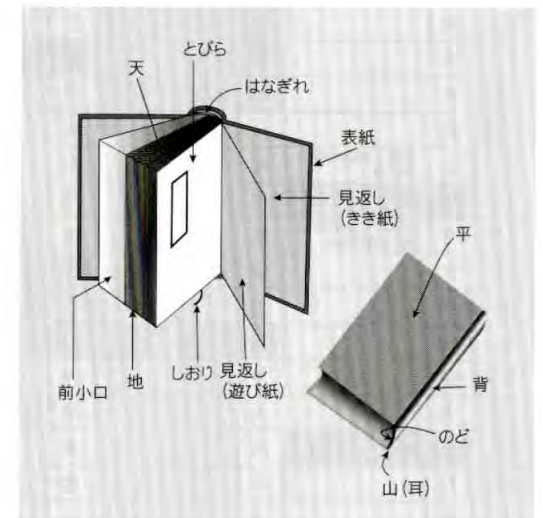
本は巻物の形で発生し、紀元1世紀頃に冊子体の書物が現れ、4世紀後半には冊子体が書物の一般的な形態になった。冊子体の書物とともに製本の技術が生まれた。冊子体書物の基本単位は折丁である。折丁は羊皮紙を折りたたむことで始まった。羊皮紙は表と裏で素材感が異なるが、折りたたむと必ず見開きのページは同じ面（表と表、裏と裏）で構成される。写本の折丁は必ずこのように構成されており「グレゴリーの法則」として認識されており、15世紀以降に書写の素材が紙に替わってテキストが印刷されるようになってからも書物の折丁にはこの法則が貫徹された。折丁は印刷された紙を折ることで作られた。

製本は折丁を順番に重ねて見返しを用意し、とじる。とじた折丁ブロックに表紙を接続すると、本は本としての形と基本的な機能を与えられる。製本の技術は時代や地域によって発展の仕方が異なりそれぞれの特性を持っているが、西欧においては書写材料に羊皮紙を使ったことが製本の形に大きく影響している。

製本の主な傷みは、とじ、見返し、表紙、背、花ぎれの傷みなどの構造上の傷みと、本文用紙、見返し用紙、表装材の傷みなどの材料の傷みである。これらは本を利用するために表紙を開く行為およびページを開く行為と大いに関連している。本の表紙を開くことにより、本の背が湾曲し、表

紙はジョイント部で2つ折り状態になり、見返しノドがつっぱる、という現象が起きる。

「とじつけ」の製本構造では表装材の厚みがジョイント部（背と平の境目）の内側に緊張を作り出す上、さらに背があまり柔軟ではなく表紙ジョイント部が唯一の可動部となる場合が多く表紙開閉による負荷がジョイント部に集中する傾向があり、そのために表紙が分離する例が多くみられる。



専修大学図書館にも、このような製本構造を持った洋古書が多く収蔵されている。特に貴重図書に指定されている洋資料には「とじつけ」の製本構造を持つものが多く、製本構造による劣化の誘因を含んでいると思われる。私達の共有の財産である文化財的な資料の劣化を防ぐためには、表紙の開閉を避ける必要性も多々起りうる。それらの資料の「保存」の目的が達成されるためにも「専修大学図書館貴重図書資料利用規程」の存在意義があると思われる。

(すずき きょうこ：生田図書課)

図書館カレンダー

月	1月	2月	3月
1	木 休館	日 休館	月
2	金 休館	月	火
3	土 休館	火	水
4	日 休館	水	木
5	月 休館	木	金
6	火 休館	金	土 <small>神田分館・7号館 分室のみ休館</small>
7	水	土	日 休館
8	木	日 休館	月
9	金	月 休館	火
10	土 <small>学部学生冬期特別 貸出返却期日</small>	火 休館	水
11	日 休館	水 休館	木
12	月 休館	木 休館	金
13	火	金 休館	土
14	水	土 休館	日 休館
15	木	日 休館	月
16	金	月	火
17	土 <small>本館・生田分館の み休館</small>	火	水
18	日 休館	水	木
19	月 <small>学部学生春期特別 貸出取扱開始</small>	木	金 <small>春期特別貸出終了 卒業年次生返却期日</small>
20	火	金	土 休館
21	水	土	日 休館
22	木	日 休館	月 休館
23	金	月	火
24	土	火	水 <small>大学院修了年次生 返却期日</small>
25	日 休館	水	木
26	月	木	金
27	火	金	土
28	水	土	日 休館
29	木	日 休館	月
30	金		火
31	土		水

- 本館・生田分館：9:00～21:00(土曜日 9:00～19:00)
 神田分館：9:00～22:00(土曜日 9:00～22:00)
 本館・生田分館：9:00～17:00(土曜日 9:00～12:00)
 神田分館：9:00～19:30(土曜日 9:00～14:30)

※ 神田分館7号館分室の開室時間は神田分館に準ずる。

神田分館の入館方法が変わりました

神田分館では9月15日から入退館システムを導入しました。

本館・生田分館同様、学生証・教職員証(学外者は図書館利用カード)を入館ゲートに通すだけで入館できます。バック類の持ち込みやコートを着用したままで図書館利用ができるようになりました。使い勝手のよさも入り入館者はグッと増えています。



学部学生の皆さんへ

■冬期特別貸出

取扱期間：12月3日(水)～12月19日(金)
返却期日：1月10日(土)
冊数：10冊まで

■春期特別貸出

取扱期間：1月19日(月)～3月19日(金)
返却期日：4月9日(金)
冊数：10冊まで

卒業年次生・大学院修了年次生の皆さんへ

- 卒業年次生の返却期日は、平成16年3月19日(金)です。
- 大学院修了年次生の返却期日は、平成16年3月24日(水)です。

専修大学図書館だより 第51号

発行日：2004年1月1日

編集・発行：専修大学図書館 館長 毛利 健三

専修大学図書館 本館 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1 〒214-8580 Tel. 044-911-1274(直)

生田分館 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1 〒214-8580 Tel. 044-911-7138(直)

神田分館 東京都千代田区神田神保町3-8 〒101-8425 Tel. 03-3265-8339(直)

専修大学図書館ホームページ <http://www.lib.senshu-u.ac.jp/>